

Oracle® Database

クイック・インストール・ガイド

10g リリース 2 (10.2) for Solaris Operating System (x86)

部品番号 : B50700-01

2008 年 12 月

このマニュアルでは、Oracle Database 10g を Solaris x86 システムにすばやくインストールする方法を説明します。次の内容について説明します。

1. このマニュアルの概要
2. `root` としてのシステムへのログイン
3. ハードウェア要件の確認
4. ソフトウェア要件の確認
5. 必要なオペレーティング・システム・グループおよびユーザーの作成
6. 必要なディレクトリの作成
7. カーネル・パラメータの構成
8. `oracle` ユーザーの環境の構成
9. 製品ディスクのマウント
10. Oracle Database のインストール
11. Oracle Database 10g Companion CD からの製品のインストール
12. インストール後の作業
13. 追加情報
14. ドキュメントのアクセシビリティについて

1 このマニュアルの概要

このマニュアルでは、デフォルトのインストール・オプションを使用して Oracle Database をインストールする方法を説明します。

このマニュアルで説明するタスク

このマニュアルでは、次のタスクを説明します。

- Oracle Database をサポートするためのシステムの構成
- 「基本インストール」オプションを使用したローカル・ファイル・システムへの Oracle Database のインストール
- データベース・ファイルの格納にローカル・ファイル・システムを使用する汎用 Oracle Database の構成



正しくインストールされた場合の結果

Oracle Database のインストールに成功すると、次の状態になります。

- 作成したデータベースおよびデフォルトの Oracle Net リスナー・プロセスがシステム上で稼働します。
- Oracle Enterprise Manager Database Control および iSQL*Plus が稼働中となり、Web ブラウザからアクセスできます。

このマニュアルで説明しないタスク

このマニュアルでは、「基本インストール」の使用例を取り上げますが、次のタスクの実行方法は説明しません。

- 「拡張インストール」オプションを使用したソフトウェアのインストール
- すでに Oracle ソフトウェアが存在するシステムへのソフトウェアのインストール
- クラスタへの Oracle Clusterware および Oracle Real Application Clusters (RAC) のインストール
- Enterprise Manager の電子メール通知または自動バックアップの有効化
- データベース記憶域としての自動ストレージ管理または RAW デバイスなどの代替記憶域の使用

追加インストール情報の入手先

このマニュアルで説明されていない情報を含む Oracle Database のインストール方法の詳細は、次のいずれかのマニュアルを参照してください。

- ソフトウェアを単一システムにインストールする場合は、『Oracle Database インストール・ガイド for Solaris Operating System (x86)』を参照してください。
- RAC インストールを実行する場合は、『Oracle Database Oracle Clusterware および Oracle Real Application Clusters インストール・ガイド for Solaris Operating System』を参照してください。このマニュアルでは、RAC インストールの前提条件である Oracle Clusterware のインストール方法も説明しています。

この 2 つのマニュアルは製品ディスクに収録されています。これらのマニュアルにアクセスするには、Web ブラウザを使用して、インストール媒体のトップレベル・ディレクトリにある welcome.htm ファイルを開き、「ドキュメント」タブを選択します。

2 root としてのシステムへのログイン

Oracle Database をインストールする前に、root ユーザーとしていくつかのタスクを実行する必要があります。root ユーザーとしてログインするには、次の手順の 1 つを実行します。

注意： ソフトウェアは、X Window System ワークステーション、X 端末または X サーバー・ソフトウェアがインストールされている PC またはその他のシステムからインストールする必要があります。

- ソフトウェアを X Window System ワークステーションまたは X 端末からインストールする場合、次の手順を実行します。
 1. X 端末 (xterm) など、ローカル・ターミナル・セッションを開始します。

2. ソフトウェアをローカル・システム以外にインストールする場合、リモート・ホストの X アプリケーションをローカル X サーバーに表示できるように次のコマンドを入力します。

```
$ xhost fully_qualified_remote_host_name
```

例:

```
$ xhost somehost.us.acme.com
```

3. ソフトウェアをローカル・システム以外にインストールする場合、ssh、rlogin または telnet コマンドを使用して、ソフトウェアをインストールするシステムに接続します。

```
$ telnet fully_qualified_remote_host_name
```

4. root ユーザーとしてログインしていない場合は、次のコマンドを入力して、ユーザーを root に切り替えます。

```
$ su - root
password:
#
```

- X サーバー・ソフトウェアがインストールされた PC またはその他のシステムからソフトウェアをインストールする手順は、次のとおりです。

注意: このタスクの実行方法の詳細は、必要に応じてご使用の X サーバーのドキュメントを参照してください。使用している X サーバー・ソフトウェアによっては、タスクの実行順序が異なる場合があります。

1. X サーバー・ソフトウェアを起動します。
2. X サーバー・ソフトウェアのセキュリティ設定を構成して、リモート・ホストの X アプリケーションをローカル・システム上で表示できるようにします。
3. ソフトウェアをインストールするリモート・システムに接続し、そのシステムで X 端末 (xterm) などのターミナル・セッションを開始します。
4. リモート・システムに root ユーザーとしてログインしていない場合は、次のコマンドを入力して、ユーザーを root に切り替えます。

```
$ su - root
password:
#
```

3 ハードウェア要件の確認

システムは、少なくとも次のハードウェア要件を満たしている必要があります。

- 512MB 以上の物理的な RAM
- 次の表に、インストール済の RAM と構成するスワップ領域の要件との関係を示します。

RAM	スワップ領域
最大 512MB	RAM のサイズの 2 倍
1024 ~ 2048MB	RAM のサイズの 1.5 倍
2049 ~ 8192MB	RAM のサイズと同等
8193MB 以上	RAM のサイズの 0.75 倍

- /tmp ディレクトリ内の 400MB のディスク領域
- インストール・タイプに応じて Oracle ソフトウェア用の 1.5 ～ 3.5GB のディスク領域
- ファイル・システム記憶域を使用する事前構成済データベース用の 1.2GB のディスク領域（オプション）

注意： 自動ストレージ管理または RAW デバイス記憶域を使用するデータベースのディスク領域要件については、この章で後述します。

自動バックアップの構成を選択した場合は、ファイル・システム上または自動ストレージ管理ディスク・グループ内に、フラッシュ・リカバリ領域用の追加ディスク領域が必要です。

システムがこれらの要件を満たしていることを確認するには、次の手順を実行します。

1. 物理的な RAM のサイズを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/prtconf | grep "Memory size"
```

システムにインストールされている物理的な RAM のサイズが必要なサイズに満たない場合は、追加のメモリーをインストールしてから続行してください。

2. 構成されているスワップ領域のサイズを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/swap -s
```

追加のスワップ領域の構成方法は、必要に応じてオペレーティング・システムのマニュアルを参照してください。

3. /tmp ディレクトリ内の空きディスク領域の量を調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# df -k /tmp
```

/tmp ディレクトリで使用できるディスク領域が 400MB 未満の場合は、次の手順の 1 つを実行します。

- /tmp ディレクトリから不要なファイルを削除します。
- oracle ユーザーの環境を設定する場合（後述します）は、TMP および TMPDIR 環境変数を設定します。
- /tmp ディレクトリを含むファイル・システムを拡張します。ファイル・システムの拡張方法は、必要に応じてシステム管理者に確認してください。

4. システム上で使用できる空きディスク領域の量を調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# df -k
```

次の表に、ソフトウェア・ファイルのおおよそのディスク領域要件をインストール・タイプごとに示します。

インストール・タイプ	ソフトウェア・ファイルの要件 (GB)
Enterprise Edition	2.0
Standard Edition	1.5
カスタム（最大値）	2.5

5. システム・アーキテクチャがソフトウェアを実行できるかどうかを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# /bin/isainfo -kv
```

このコマンドにより、プロセッサ・タイプが表示されます。プロセッサ・アーキテクチャがインストールする Oracle ソフトウェアのリリースと一致することを確認します。

次に、このコマンドの予想される出力を示します。

```
32-bit i386 kernel modules
```

予想していた出力が表示されない場合、このシステムにソフトウェアをインストールすることはできません。

4 ソフトウェア要件の確認

ご使用のオペレーティング・システムのディストリビューションおよびバージョンごとに、システムが少なくとも次のソフトウェア要件を満たしている必要があります。

注意： Oracle Universal Installer は、記載されている要件を満たしているかどうか確認するために、システムのチェックを実行します。これらのチェックが確実に成功するように、Oracle Universal Installer を起動する前に要件を確認してください。

- オペレーティング・システムのバージョンが Solaris 10 であること。
- 次のパッケージ（またはそれ以上のバージョン）がインストールされていること。

```
SUNWarc  
SUNWbtool  
SUNWhea  
SUNWlibm  
SUNWlibms  
SUNWsprot  
SUNWttoo  
SUNWilof  
SUNWilcs  
SUNWi15cs  
SUNWxfnt
```

インストールする Oracle 製品について、システムが次の製品固有の要件を満たす必要があります。

- Oracle Messaging Gateway

Oracle Messaging Gateway は、Oracle Streams アドバンスド・キューイング (AQ) と次のソフトウェアの統合をサポートします。

- IBM MQSeries V6.0、クライアントおよびサーバー
- Tibco Rendezvous 7.2

- PL/SQL のネイティブ・コンパイル、Pro*C/C++、Oracle Call Interface、Oracle C++ Call Interface および Oracle XML Developer's Kit (XDK)

- Sun ONE Studio 10 (C および C++ 5.5)
- gcc 3.4.2

■ Oracle JDBC/OCI ドライバ

Oracle JDBC/OCI ドライバとともに次の JDK バージョンを使用できます。

ただし、これらはインストールに必須ではありません。

- Sun Java 2 SDK Standard Edition 1.3.1_11 および JNDI 拡張機能
- Sun Java 2 SDK Standard Edition 1.2.2_17 および JNDI 拡張機能

注意: このリリースには、JDK 1.4.2_08 がインストールされています。

システムがこれらの要件を満たしていることを確認するには、次の手順を実行します。

1. Solaris のバージョンを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# uname -r
```

2. 必要なパッケージがインストールされているかどうかを調べるには、次のようなコマンドを入力します。

```
# pkginfo -i SUNWarc SUNWbtool SUNWhea SUNWlibm \
SUNWlibms SUNWsprot SUNWspox SUNWtoo SUNWilof \
SUNWilcs SUNWil5cs SUNWxfnt
```

パッケージがインストールされていない場合、またはバージョンが必須バージョンより以前のものである場合、インストールします。

また、システムに次のパッチ（またはそれ以降のバージョン）がインストールされていることを確認する必要があります。リストに続く手順では、これらの要件を確認する方法について説明します。

注意: リストに記載されているよりも新しいバージョンのパッチがシステムにインストールされている場合があります。リストに記載されているパッチがインストールされていない場合は、リストに記載されているバージョンをインストールする前に、最新のバージョンがインストールされているかどうかを調べてください。

■ Solaris 10 のすべてのインストールについて、次のパッチが必要です。

- 118345-03: SunOS 5.10_x86: ld & libc.so.1 Patch
- 119961-01: SunOS 5.10_x86, x64, Patch for assembler

■ Solaris 10 における PL/SQL のネイティブ・コンパイル、および Pro*C/C++、Oracle Call Interface、Oracle C++ Call Interface または Oracle XML Developer's Kit (XDK) のインストールの場合、次のパッチが必要です。

- 117837-05: Optimizer compiler patch for C++ compiler
- 117846-08: Optimizer Compiler patch for C++ compiler
- 118682-01: Patch for SS10_x86 debuginfo handling

■ Oracle Messaging Gateway インストールの場合、WebSphere MQ の次の修正サービス・ディスク (CSD) が必要です。

- MQSeries V6.0 の CSD09 以上
- MQSeries PTF U478911 SupportPac MACE

システムがこれらの要件を満たしていることを確認するには、次の手順を実行します。

1. オペレーティング・システム・パッチがインストールされているかどうかを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/patchadd -p | grep patch_number
```

オペレーティング・システム・パッチがインストールされていない場合は、次の Web サイトからダウンロードしてインストールします。

<http://sunsolve.sun.com>

2. CSD または SupportPac for WebSphere MQ が必要な場合は、ダウンロードおよびインストールの情報について次の Web サイトを参照してください。

<http://www.ibm.com/software/integration/mqfamily/support/summary/sun.html>

5 必要なオペレーティング・システム・グループおよびユーザーの作成

Oracle Database をインストールする場合、次のローカル・オペレーティング・システム・グループおよびユーザーが必要です。

- Oracle インベントリ・グループ (oinstall)
- OSDBA グループ (dba)
- Oracle ソフトウェア所有者 (oracle)
- 権限のないユーザー (nobody)

これらのグループおよびユーザーがすでに存在しているかどうかを調べる場合、または必要に応じて作成する場合は、次の手順に従います。

1. oinstall グループが存在しているかどうかを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# more /var/opt/oracle/oraInst.loc
```

oraInst.loc ファイルが存在する場合、このコマンドの出力結果は次のようになります。

```
inventory_loc=/u01/app/oracle/oraInventory
inst_group=oinstall
```

inst_group パラメータは、Oracle インベントリ・グループの名前 oinstall を示しています。

2. dba グループが存在しているかどうかを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# grep dba /etc/group
```

このコマンドの出力結果が dba グループ名を示している場合、そのグループはすでに存在しています。

3. 必要に応じて次のコマンドを入力し、oinstall グループおよび dba グループを作成します。

```
# /usr/sbin/groupadd oinstall
# /usr/sbin/groupadd dba
```

4. oracle ユーザーが存在し、正しいグループに属しているかどうかを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# id -a oracle
```

oracle ユーザーが存在する場合は、このコマンドにより、ユーザーが属しているグループに関する情報が表示されます。出力結果は次のようになります。oinstall がプライマリ・グループで、dba がセカンダリ・グループであることが示されています。

```
uid=440(oracle) gid=200(oinstall) groups=201(dba),202(oper)
```

5. 必要に応じて、次の処理の1つを実行します。
- oracle ユーザーが存在していても、プライマリ・グループが oinstall ではないか、そのユーザーが dba グループのメンバーではない場合は、次のコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/usermod -g oinstall -G dba oracle
```
 - oracle ユーザーが存在しない場合は、次のコマンドを入力して作成します。

```
# /usr/sbin/useradd -g oinstall -G dba oracle
```

このコマンドにより oracle ユーザーが作成され、プライマリ・グループとして oinstall、セカンダリ・グループとして dba が指定されます。
6. 次のコマンドを入力して、oracle ユーザーのパスワードを設定します。

```
# passwd -r files oracle
```
7. nobody ユーザーが存在しているかどうかを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# id nobody
```

このコマンドに nobody ユーザーに関する情報が表示される場合、ユーザーを作成する必要はありません。

nobody ユーザーが存在しない場合は、次のコマンドを入力して作成します。

```
# /usr/sbin/useradd nobody
```

6 カーネル・パラメータの構成

次のカーネル・パラメータが、表示されている推奨値以上の値に設定されていることを確認します。

パラメータ	リソース・コントロールによる置換	推奨値
noexec_user_stack	なし	1
semsys:seminfo_semmni	project.max-sem-ids	100
semsys:seminfo_semmns	なし	1024
semsys:seminfo_semmsl	project.max-sem-nsems	256
semsys:seminfo_semvmx	なし	32767
shmsys:shminfo_shmmax	project.max-shm-memory	4294967295
shmsys:shminfo_shmmin	なし	1
shmsys:shminfo_shmmni	project.max-shm-ids	100
shmsys:shminfo_shmseg	なし	10

注意： パラメータの現在の値がこの表に示された値より大きい場合、そのパラメータの値は変更しないでください。

これらのカーネル・パラメータに指定されている現在の値を表示し、必要に応じてその値を変更するには、次の手順を実行します。

1. これらのパラメータの現在の値を表示するには、次のコマンドを入力します。

```
# id -p // to verify the project id
uid=0(root) gid=0(root) projid=1 (user.root)
# prctl -n project.max-shm-memory -i project user.root
# prctl -n project.max-sem-ids -i project user.root
```

2. 現在の値を変更する必要がある場合は、次の手順を実行します。

- a. max-shm-memory の値を 6GB に変更するには、次のコマンドを使用します。

```
# prctl -n project.max-shm-memory -v 6gb -r -i project user.root
```

- b. max-sem-ids の値を 256 に変更するには、次のコマンドを使用します。

```
# prctl -n project.max-sem-ids -v 256 -r -i project user.root
```

注意： prctl コマンド（リソース・コントロール）を使用してシステム・パラメータを変更する場合、これらのパラメータの変更を有効にするためにシステムを再起動する必要はありません。ただし、変更したパラメータはシステムの再起動後は保持されません。

システム再起動後に設定を有効にするためにリソース・コントロール・プロジェクト設定を変更する手順は、次のとおりです。

1. デフォルトでは、Oracle インスタンスは dba グループの oracle ユーザーとして実行されます。group.dba という名前を持つプロジェクトが、oracle ユーザーのデフォルト・プロジェクトとなるように作成されます。oracle ユーザーのデフォルト・プロジェクトを確認するには、id コマンドを実行します。

```
# su - oracle
$ id -p
uid=100(oracle) gid=100(dba) projid=100(group.dba)
$ exit
```

2. 最大共有メモリー・サイズを 2GB に設定するには、project.max-shm-memory=(privileged, 2147483648,deny) リソース・コントロールを Oracle プロジェクトのプロジェクト・エントリの最終フィールドに追加するか、または projmod コマンドを実行します。

```
# projmod -sK "project.max-shm-memory=(privileged, 2G,deny)" group.dba
```

3. これらの手順が完了した後、/etc/project ファイルには次の内容が含まれる必要があります。

```
# cat /etc/project
```

次に、このコマンドの出力を示します。

```
system:0:::
user.root:1:::
noproject:2:::
default:3:::
group.staff:10:::
group.dba:100:Oracle default
project:::project.max-shmmemory=(privileged,2147483648,deny)
```

4. リソース・コントロールがアクティブであることを確認するには、`id` コマンドおよび `prctl` コマンドを実行します。

```
# su - oracle
$ id -p
uid=100(oracle) gid=100(dba) projid=100(group.dba)
$ prctl -n project.max-shm-memory -i process $$
process: 5754: -bash
NAME      PRIVILEGE      VALUE      FLAG      ACTION      RECIPIENT
project.max-shm-memory
           privileged      2.00GB      -          deny
```

注意： 詳細は、『Solaris Tunable Parameters Reference Manual』を参照してください。

7 必要なディレクトリの作成

次のような名前のディレクトリを作成し、それらのディレクトリに、適切な所有者、グループおよびアクセス権を指定します。

- Oracle ベース・ディレクトリ
- オプションの Oracle データ・ファイル・ディレクトリ（オプション）

Oracle ベース・ディレクトリには 3GB の空きディスク領域、Oracle データファイル・ディレクトリを別に作成しない場合は、4GB の空きディスク領域が必要です。

注意： Oracle データファイル・ディレクトリを別に作成しない場合、データファイルを Oracle ベース・ディレクトリのサブディレクトリにインストールできます。ただし、これは本番データベースの場合はお薦めしません。

これらのディレクトリを作成する場所を決定するには、次の手順を実行します。

1. 次のコマンドを入力して、マウントされているすべてのファイル・システムに関する情報を表示します。

```
# df -k
```

このコマンドにより、システムにマウントされているすべてのファイル・システムに関する情報が表示されます。次のような情報があります。

- 物理デバイス名
 - ディスク領域の合計量、使用量および使用可能な量
 - そのファイル・システムのマウント・ポイント
2. 表示された情報から、次の要件を満たす 1 つまたは 2 つのファイル・システムを特定します。
- 1.2GB 以上の空きディスク領域を持つ単一ファイル・システム
 - 合計で 1.2GB 以上の空きディスク領域を持つ 2 つ以上のファイル・システム
3. 特定した各ファイル・システムのマウント・ポイント・ディレクトリの名前を書き留めます。

次の例では、`/u01` はソフトウェアに使用されるマウント・ポイント・ディレクトリであり、`/u02` は Oracle データ・ファイル・ディレクトリに使用されるマウント・ポイント・ディレクトリです。システム上のファイル・システムに適切なマウント・ポイント・ディレクトリを指定する必要があります。

必要なディレクトリを作成し、それらのディレクトリに、適切な所有者、グループおよびアクセス権を指定するには、次の手順を実行します。

注意： 次の手順で、/u01 および /u02 を前述の手順 3 で特定した適切なマウント・ポイント・ディレクトリに置き換えます。

1. 次のコマンドを入力して、Oracle ベース・ディレクトリに対して特定したマウント・ポイント・ディレクトリにサブディレクトリを作成します。

```
# mkdir -p /u01/app/oracle
```

2. Oracle Database ファイルの 2 番目のファイル・システムを使用する場合は、Oracle データ・ファイル・ディレクトリに対して特定したマウント・ポイント・ディレクトリに oradata サブディレクトリ（例では /u02）を作成します。

```
# mkdir /u02/oradata
```

3. 作成したディレクトリの所有者およびグループを、oracle ユーザーおよび oinstall グループに変更します。

```
# chown -R oracle:oinstall /u01/app/oracle
# chown -R oracle:oinstall /u02/oradata
```

4. 作成したディレクトリのアクセス権を 775 に変更します。

```
# chmod -R 775 /u01/app/oracle
# chmod -R 775 /u02/oradata
```

8 oracle ユーザーの環境の構成

Oracle Universal Installer は、oracle アカウントから実行します。ただし、Oracle Universal Installer を起動する前に、oracle ユーザーの環境を構成する必要があります。環境を構成するには、次の設定が必要です。

- シェル起動ファイルで、デフォルトのファイル・モード作成マスク（umask）を 022 に設定します。
- DISPLAY 環境変数を設定します。

oracle ユーザーの環境を設定するには、次の手順を実行します。

1. X 端末（xterm）など、新規のターミナル・セッションを開始します。
2. X Window アプリケーションがこのシステムで表示できることを確認するために、次のコマンドを入力します。

```
$ xhost fully_qualified_remote_host_name
```

3. 次の手順の 1 つを実行します。

- ターミナル・セッションがソフトウェアのインストール先のシステムに接続されていない場合は、そのシステムに oracle ユーザーとしてログインします。
- ターミナル・セッションがソフトウェアのインストール先のシステムに接続されている場合は、ユーザーを oracle に切り替えます。

```
$ su - oracle
```

4. oracle ユーザーのデフォルトのシェルを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
$ echo $SHELL
```

5. oracle ユーザーのシェル起動ファイルをテキスト・エディタで開きます。
 - Bourne シェル (sh)、SUSE の Bash シェル (bash) または Korn シェル (ksh) :

```
$ vi .profile
```
 - C シェル (csh または tcsh) :

```
% vi .login
```
6. シェル起動ファイルで次の行を入力または編集して、デフォルトのファイル・モード作成マスクに値 022 を指定します。

```
umask 022
```
7. ORACLE_SID、ORACLE_HOME または ORACLE_BASE 環境変数がファイルで設定されている場合は、ファイルから該当する行を削除します。
8. ファイルを保存して、エディタを終了します。
9. シェルの起動スクリプトを実行するには、次のコマンドを入力します。
 - Bash シェル :

```
$ . ~/.bash_profile
```
 - Bourne または Korn シェル :

```
$ . ~/.profile
```
 - C シェル :

```
% source ~/.login
```
10. ソフトウェアのインストール先がローカル・システムではない場合は、ローカル・システムに表示するために、次のようなコマンドを入力して、X アプリケーションに指示します。
 - Bourne、Bash または Korn シェル :

```
$ DISPLAY=local_host:0.0 ; export DISPLAY
```
 - C シェル :

```
% setenv DISPLAY local_host:0.0
```

この例で `local_host` は、Oracle Universal Installer の表示に使用するシステム (ワークステーションまたは PC) のホスト名または IP アドレスです。
11. ハードウェア要件を確認したときに /tmp ディレクトリの空きディスク領域が不十分と判断した場合は、次のコマンドを入力して、TMP および TMPDIR 環境変数を次のように設定します。十分な空きディスク領域があるファイル・システム上のディレクトリを指定します。
 - Bourne、Bash または Korn シェル :

```
$ TMP=/mount_point/tmp  
$ TMPDIR=/mount_point/tmp  
$ export TMP TMPDIR
```
 - C シェル :

```
% setenv TMP /mount_point/tmp  
% setenv TMPDIR /mount_point/tmp
```

12. 次のようなコマンドを入力して、ORACLE_BASE および ORACLE_SID 環境変数を設定します。

- Bourne、Bash または Korn シェル:

```
$ ORACLE_BASE=/u01/app/oracle
$ ORACLE_SID=sales
$ export ORACLE_BASE ORACLE_SID
```

- C シェル:

```
% setenv ORACLE_BASE /u01/app/oracle
% setenv ORACLE_SID sales
```

この例では、/u01/app/oracle は以前に作成した Oracle ベース・ディレクトリ、sales はデータベースをコールする場合に使用する名前（通常は 5 文字以下）です。

13. ORACLE_HOME および TNS_ADMIN 環境変数が設定されていないことを確認するために、次のコマンドを入力します。

- Bourne、Bash または Korn シェル:

```
$ unset ORACLE_HOME
$ unset TNS_ADMIN
```

- C シェル:

```
% unsetenv ORACLE_HOME
% unsetenv TNS_ADMIN
```

14. 環境が正しく設定されたことを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
$ umask
$ env | more
```

umask コマンドにより値 22、022 または 0022 が表示されていること、およびこの項で設定した環境変数に適切な値が設定されていることを確認します。

9 製品ディスクのマウント

ほとんどの Solaris システムでは、製品ディスクをドライブに挿入すると自動的にマウントされます。ディスクが自動的にマウントされない場合は、次の手順を実行してマウントします。

1. ユーザーを root に切り替えます。

```
$ su - root
```

2. 必要に応じて、次のようなコマンドを入力して現在マウントされているディスクを取り出し、ドライブから取り除きます。

```
# eject
```

3. 適切なディスクをディスク・ドライブに挿入します。

4. ディスクが自動的にマウントされたことを確認するには、次のようなコマンドを入力します。

```
# ls /dvd/dvd0
```

5. このコマンドによってディスクの内容が表示されない場合、次のようなコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/mount -r -F hsfs /dev/dsk/cxytdzs2 /dvd
```

この例では、/dvd はディスク・マウント・ポイント・ディレクトリ、
/dev/dsk/c0t6d0s2 はディスク・デバイスのデバイス名です。たとえば、
/dev/dsk/c0t6d0s2 のようになります。

6. Oracle Universal Installer に「ディスクの場所」ダイアログ・ボックスが表示される場合は、ディスク・マウント・ポイント・ディレクトリ・パスを入力します。

例：

- ディスクを自動的にマウントする場合：

```
/dvd/dvd0
```

- ディスクを手動でマウントする場合：

```
/dvd
```

10 Oracle Database のインストール

oracle ユーザーの環境を構成した後、次のようにして Oracle Universal Installer を起動し、Oracle Database をインストールします。

注意： DVD からソフトウェアをインストールしている場合、次のようなコマンドを使用してください。

```
$ /mount_point/db/runInstaller
```

1. Oracle Universal Installer を起動するには、次のコマンドを入力します。

- インストール・ファイルがディスク上にある場合は、次のコマンドを入力します。*directory_path* は、DVD 上の db ディレクトリのパスです。

```
$ cd /tmp  
$ /directory_path/runInstaller
```

- インストール・ファイルがハード・ディスク上にある場合は、ディレクトリを db に変更して、次のコマンドを入力します。

```
$ ./runInstaller
```

Oracle Universal Installer が起動しない場合、『Oracle Database インストレーション・ガイド for Solaris Operating System (x86)』の X Window の表示に関する問題のトラブルシューティング方法を参照してください。

2. 次の表に、Oracle Universal Installer の各画面で推奨するアクションを説明します。次のガイドラインを使用して、インストールを完了します。

- より詳細な情報が必要な場合、またはデフォルト以外のオプションを選択する場合、「ヘルプ」をクリックすると追加情報が表示されます。
- ソフトウェアのインストール時またはリンク時にエラーが発生した場合、『Oracle Database インストレーション・ガイド for Solaris Operating System (x86)』のトラブルシューティングに関する情報を参照してください。

注意： 前述のタスクを完了している場合、ほとんどの画面でデフォルトを選択してインストールを完了できます。

画面	推奨するアクション
インストール方法の選択	デフォルトでは、「基本インストール」オプションが選択されています。 Oracle ホームのディレクトリ・パスを指定します。UNIX DBA グループ <code>oinstall</code> が選択されていることを確認します。初期データベースを作成する場合は、初期データベースの名前およびパスワードを設定します。「次へ」をクリックします。 注意：この画面は、「基本インストール」および「拡張インストール」オプションで構成されています。カスタム・インストールを使用する場合は、「拡張インストール」オプションを選択してください。
インベントリ・ディレクトリおよび接続情報の指定	この画面は、システム上に初めて Oracle 製品をインストールする場合にのみ表示されます。 Oracle インベントリ・ディレクトリのフルパスを指定します。選択されているオペレーティング・システム・グループが <code>oinstall</code> であることを確認します。「次へ」をクリックします。
製品固有の前提条件の確認	前提条件の確認がすべて成功したかどうかを確認してから、「次へ」をクリックします。 Oracle Universal Installer は、システムが Oracle ソフトウェアを実行するように正しく構成されているかどうかを確認します。このマニュアルに記載されているインストール前の手順をすべて実行した場合は、すべての確認が成功します。 確認に失敗した場合は、画面に表示された失敗の原因を確認してください。可能であれば、問題を修正して確認を再実行します。システムが要件を満たしていることを確認した場合は、失敗した確認のチェック・ボックスを選択して、要件を手動で確認することもできます。
サマリー	この画面に表示されている情報を確認して、「インストール」をクリックします。
インストール	「インストール」画面には、製品のインストール中にステータス情報が表示されます。
コンフィギュレーション・アシスタント	この画面には、ソフトウェアの構成およびデータベースの作成を実行するコンフィギュレーション・アシスタントのステータス情報が表示されます。このプロセスの終了時にメッセージが表示された場合は、「OK」をクリックして続行します。
構成スクリプトの実行	プロンプトが表示されたら、指示を読み、この画面に表示されたスクリプトを実行します。「OK」をクリックして続行します。
インストールの終了	コンフィギュレーション・アシスタントにより、Oracle Enterprise Manager Database Control を含めたいくつかの Web ベース・アプリケーションが構成されます。この画面には、これらのアプリケーションに対して構成された URL が表示されます。使用されている URL を書き留めます。これらの URL で使用されているポート番号は、次のファイルにも記録されています。 <code>oracle_home/install/portlist.ini</code> Oracle Universal Installer を終了するには、「終了」をクリックしてから「はい」をクリックします。

11 Oracle Database 10g Companion CD からの製品のインストール

Oracle Database 10g Companion CD には、インストール可能なその他の製品が収録されています。これらの製品のインストールが必要かどうかは、使用する Oracle Database 製品または機能によって異なります。次の製品または機能を使用する場合は、Companion CD から Oracle Database 10g 製品をインストールする必要があります。

- JPublisher
- Oracle JVM
- Oracle *interMedia*
- Oracle JDBC Development Drivers
- Oracle SQLJ
- Oracle Database のサンプル
- Oracle Text 提供のナレッジ・ベース
- Oracle Ultra Search
- Oracle HTML DB
- Oracle Workflow サーバーおよび中間層コンポーネント

Companion CD からソフトウェアをインストールする方法の詳細は、『Oracle Database Companion CD クイック・インストール・ガイド for Solaris Operating System (x86)』を参照してください。

12 インストール後の作業

Oracle Database のこのリリースについて理解するために、次のタスクを実行することをお勧めします。

- Web ブラウザから Oracle Enterprise Manager Database Control にログインします。

Oracle Enterprise Manager Database Control は、1 つの Oracle Database インストールの管理に使用できる Web ベースのアプリケーションです。Database Control のデフォルトの URL は、次のようになります。

`http://host.domain:1158/em/`

ログインするには、ユーザー名 SYS を使用して SYSDBA として接続します。Oracle Database 10g のインストール時にこのユーザーに対して指定したパスワードを使用します。

- 『Oracle Database インストール・ガイド for Solaris Operating System (x86)』の、必須およびオプションのインストール後のタスクを参照してください（使用する製品によって異なります）。
- 『Oracle Database インストール・ガイド for Solaris Operating System (x86)』の、Database Control を使用してインストール済データベースの構成を確認する方法を参照してください。
- Oracle Enterprise Manager Database Control を使用してデータベースを管理する方法については、『Oracle Database 2 日でデータベース管理者』を参照してください。

このマニュアルは、新しい Oracle DBA を対象としており、Database Control を使用して、Oracle Database インストールのあらゆる面を管理する方法を説明します。また、インストール時に構成しなかった可能性がある、電子メール通知および自動バックアップを使用可能にする方法も説明しています。

13 追加情報

この項では、次の内容について説明します。

- [製品のライセンス](#)
- [サポートおよびサービス](#)

製品のライセンス

このメディア・パックに含まれている製品は、トライアル・ライセンス契約に基づき、30日間、インストールおよび評価できます。ただし、30日間の評価期間後もいずれかの製品の使用を継続する場合、プログラム・ライセンスをご購入いただく必要があります。

サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

Oracle サポート・サービス オラクル製品サポートの購入方法、および Oracle サポート・サービスへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.com/lang/jp/support/index.html>

製品マニュアル 製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://www.oracle.com/technology/global/jp/documentation/index.html>

研修およびトレーニング 研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

http://education.oracle.com/pls/web_prod-plq-dad/db_pages.getpage?page_id=3

その他の情報 オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.com/lang/jp/index.html>

<http://www.oracle.com/technology/global/jp/index.html>

注意： ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

14 ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかしスクリーン・リーダーは括弧だけの行を読まない場合があります。

外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

Oracle サポート・サービスへの TTY アクセス

アメリカ国内では、Oracle サポート・サービスへ 24 時間年中無休でテキスト電話 (TTY) アクセスが提供されています。TTY サポートについては、(800)446-2398 にお電話ください。

Oracle Database クイック・インストール・ガイド, 10g リリース 2 (10.2) for Solaris Operating System (x86)
部品番号: B50700-01

Oracle Database Quick Installation Guide, 10g Release 2 (10.2) for Solaris Operating System (x86)

原本部品番号: B31215-01

Copyright © 2008, Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム (ソフトウェアおよびドキュメントを含む) には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段 (電子的または機械的)、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空、大量輸送、医療あるいはその他の本質的に危険を伴うアプリケーションで使用されることを意図しておりません。このプログラムをかかる目的で使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万が一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle, JD Edwards, PeopleSoft, Siebel は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性があり得ます。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行 (製品またはサービスの提供、保証義務を含む) に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。